

2021/1/29

澤田知子 狐の嫁いり

Tomoko Sawada: To Be Bewitched by a Fox

2021年3月2日（火） - 5月9日（日）



《ID400》部分 1998年

自動証明写真機で撮影したオリジナルプリント

東京都写真美術館蔵

©Tomoko Sawada

展覧会概要

澤田知子は大学の卒業制作で実質的なデビュー作とされている〈ID400〉（1998）で2000年度写真新世紀特別賞を受賞、2003年度第29回木村伊兵衛写真賞に続き、2004年にはNY国際写真センターThe Twentieth Annual ICP Infinity Award for Young Photographerに選出されるなど、デビューから現在に至るまで、国内外で高い評価を得ています。

本展は、澤田の原点となる《Untitled》（1996）から最新作《Reflection》（2020）までの代表作を網羅し、澤田の25年間にわたる旺盛な制作活動を概観する、公立美術館における初大規模個展です。

本展のみどころ

国内外から注目が集まる、澤田知子の公立美術館初となる大規模個展

本展は、デビュー以来、第一線で活躍する澤田知子の国内初となる公立美術館における大規模個展です。本展は作家の25年間におよぶ全活動を回顧するのみにとどまらず、新旧の代表作を澤田自身によって新たな視点で編みなおし、展覧会全体をひとつの新作として捉えて構成する意欲的な試みです。

澤田作品の独自性と魅力、人間の「内面」と「外見」の関係性

澤田は自身の表現において、“内面と外見の関係”という普遍的なテーマを問い続け、自らの姿や顔を被写体にし、ポートレイトの手法を軸に作品を制作してきました。本展では「セルフイー」や「自撮り」といった行為が一般化する近年において、澤田の表現を通じてセルフポートレイトが人々を惹きつける理由を再検証するとともに、澤田作品の独自性とその魅力に迫ります。本展は圧倒的な存在感を放つ、澤田の変化自在な姿を目の当たりにして、観賞者と作家間の「見る／見られる」の関係が逆転するかのような鮮烈な観賞体験を生み出すことでしょう。

初期作品《Untitled》から最新作までを網羅的に紹介

本展は、最新作《Reflection》(2020)を初公開するほか、デビュー作《ID400》(1998)の貴重なオリジナルバージョン*を出品いたします。本作は、通常400枚のインスタント写真を複製したプリントで展示されますが、本展では、自動証明写真機で撮影・変装を400回繰り返して制作された、世界で唯一のオリジナルバージョンは2002年に開催されたグループ展での発表以来、約20年振りの公開となります。本展は澤田の原点《Untitled》(1996)から最新作までを網羅的に紹介します。

*《ID400》は400点の自動証明写真を組み合わせた作品。1998年当時、澤田はモノクロプリントの自動証明写真機を探し、神戸市営地下鉄沿線にある立体駐車場の中にある証明写真機にたどり着き本作を制作した。自動証明写真機は、現像液を使用するアナログタイプの写真機で、撮影した写真は写真機の中で現像され、銀塩写真として完成する。

「狐の嫁いり」展によせて

本展作品リストより一部抜粋

この展覧会は新旧、複数のシリーズを組み合わせで生まれた「狐の嫁いり」という1つの新作と考えて構成しています。「狐の嫁いり」のコンセプトは仮面とお面です。仮面は面をかぶって自分の正体を隠し、面を演じる必要はないのですが、お面はかぶった面を演じることが前提になります。私の作品は仮面なのですが、作品をご覧になった多くの人はお面をかぶっていると思うようです。

私の作品を私と同じように感じたり理解してくれる人に出会ったことはありません。でもそれで良いのです。変装をただ楽しむのも、作品を批評的に見るのも自由です。私も切り口を変えながら「外見と内面の関係」という答えの出ないテーマについて考え続けていますが、作品を理解できているのかどうかは分かりません。そして誰よりも作品を理解したいと思っているのは私自身かもしれません。

(澤田 知子)

出品作品 計 13 作品 (予定)

1 《Reflection》 2020 年 発色現像方式印画 (100 点組) 作家蔵 **【最新作/初公開】**

ここ数年「どうやって人は人を判断するのか」について考えています。後ろ姿からどこまで人は想像するのか？どこまで想像できるのか？何が想像させるのか？後ろ姿に何が写っているのか私は知りたいのです。

—— 澤田 知子

2 《影法師》 2018 年 **【映像作品】**

シングル・チャンネル・ビデオ、B&W、サイレント、ループ 東京都写真美術館蔵



©Tomoko Sawada

澤田が長い間試行錯誤していた映像作品。この《影法師》は、前作《FACIAL SIGNATURE》から取り組んでいる「どうやって人は人を判断するのか」という疑問からつながって生まれた作品です。写真の基本でもある光と影の表現としてつくられていますが、そこには少し秘密が組み込まれています。映っているものは何なのか？これはセルフポートレートなのだろうか？本作品で、澤田は写真・映像の根本的な問いを投げかけます。

3 《BLOOM》 2017-2020 年 インクジェット・プリント (22 点組) 作家蔵



©Tomoko Sawada

美容雑誌『etRouge』（日経 BP）に連載されたシリーズ。『etRouge』の掲載されているメイクによって、メイクに対するトキメキを取り戻したと、澤田は語ります。辞書によると「Bloom」の原義は「最盛期の花」。開花する、開花させる、どちらの意味でも、本作を見て、開花させようと思ってくれる人、自然に開花する人、メイクの力を思い出してトキメキ人がいてくれたらという思いで制作されました。自分の顔を好きになれないなら描けばいい、観る人をそんな前向きな気持ちにさせる作品です。

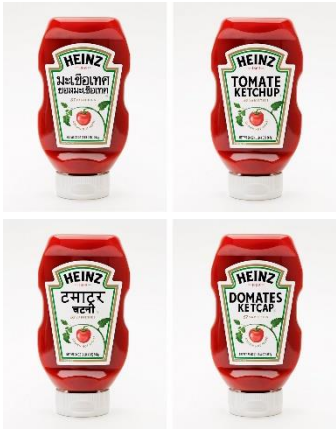
4 《FACIAL SIGNATURE》 2015 年 発色現像方式印画 (300 点組) タグチ・アートコレクション



©Tomoko Sawada

顔は判子や署名のように、その人それぞれの ID、本人を証明するものではないでしょうか。よく似た容姿であっても、顔を確認するまでは個人を特定することができません。世界中の人間は遺伝子的に 99.99999%同じ人間であり、国籍や人種など様々に違いはあっても、それらは人間についている付加価値のようなものです。澤田はニューヨークに住んでいた頃、色々なアジア人に見間違えられたと言います。人は何を、どこを見て個人を判断しているのか知りたいと思い、様々なアジア人に見えるように変装して撮影された作品です。

5 《sign》 2012年 発色現像方式印画（56点×2組）作家蔵



©Tomoko Sawada

このシリーズはアンディ・ウォーホール美術館主催のレジデンスプロジェクト“Factory Direct”でハインツ社とのコラボレーションによって制作されました。澤田は、これまでのセルフポートレイトの手法から“TOMATO KETCHUP”と“YELLOW MUSTARD”を様々な外国語に変装させるアイデアに至りました。地球上の全ての言語を読める人、理解できる人はいないと思いますが、ある言語の文字の形や雰囲気から一定の地域を想像することは可能で、もしそれが見たことのある文字であれば、私たちはその国のことを思い出すこともできます。それは欧米人が、韓国人、中国人、日本人の見分けがつかないことに似ていて、言語も出会ってすぐにどこの地域の人なのか外見だけでは分からないのと同じことのように感じられます。

6 《これ、わたし》 2010年 発色現像方式印画（36点組）東京都写真美術館蔵



©Tomoko Sawada

2011年に福音館書店の月刊誌『たくさんのふしぎ』で出版した絵本『これ、わたし』のために撮りおろされたシリーズです。《ID400》のエッセンス版とも言える作品で、よりシンプルに限界まで削ぎ落とされ、「外見と内面の関係」について追求した作品です。

7 《Decoration / Face》 2008年 発色現像方式印画（20点組）作家蔵



©Tomoko Sawada

海外の美術館から“原宿ルック”というテーマで展覧会依頼があり制作された作品。依頼を受けた時にはすでにコギャルをモチーフに制作した《cover》シリーズがあったため、ロリータファッションと呼ばれる外見をモチーフとした新作と組み合わせることで展覧会が構成されました。《cover》シリーズと同じく全身が写ったものと顔のアップの2種類から構成されるシリーズですが、本展では顔のアップのみ展示します。

（衣装協力 BABY, THE STARS SHINE BRIGHT）

8 《MASQUERADE》 2006年 発色現像方式印画（50点組）作家蔵



©Tomoko Sawada

Masquerade とは仮面舞踏会を意味します。人は皆その時々状況や相手に合わせた仮面をかぶっています。その人間らしさを象徴的に表わすことができる場としてキャバクラを選び、キャバクラ嬢をモチーフに制作されました。

9 《Recruit》 2006年 発色現像方式印画（100枚組3点）作家蔵



©Tomoko Sawada

澤田は十代の頃から、リクルートスーツを着たたくさんの人を街で見かけては違和感をもっていました。自身が就職活動をする年齢になった時には、友人たちが髪を黒く染めてヒールを脱ぎ、丈が長めのスカートを履いているのを見てますます違和感を感じたと言います。本作は、その違和感を履歴書に貼る証明写真を使って作品化したものです。

10 《glasses》 2006年 発色現像方式印画（10点組）作家蔵



雑誌『Esquire』のメガネ特集用に取り下ろした作品。メガネは他の作品でも使っている変装アイテムの1つで、メイクをしない男性にとっては髭とメガネが女性にとってのメイクと捉えることができないのでしょうか。本展では初めて特注の展示什器を使った展示を試みます。



©Tomoko Sawada

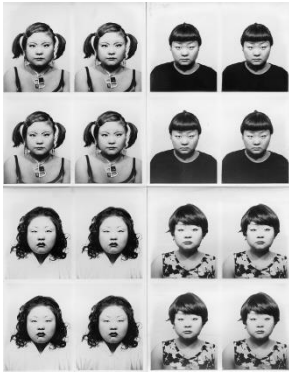
11 《cover / Face》 2002年 発色現像方式印画（20点組）作家蔵



©Tomoko Sawada

ガングロと呼ばれたコギャルが流行した90年代、彼女たちの外見だけを見てメディアで否定的な判断をされていたことに違和感もち、この誰もが知る社会現象となった流行を澤田は作品化しました。このインパクトのあるメイクやファッションは一見个性的に見えます。しかし、塗りたくることで個性をだしている人もいれば、友達と同じようにメイクをすることで自分の個性を隠している人もいたのではないのでしょうか。作品は当時雑誌で彼女たちがとっていたようなポーズをしたものと、証明写真のように無表情な顔のアップの2種類で構成されていますが、本展では顔のアップのみ展示します。

12 《ID400》 1998年 自動証明写真機で撮影したオリジナルプリント／ゼラチン・シルバー・プリント（100枚組4点／4枚組1点）東京都写真美術館蔵、うち《SKIN HEAD》4枚組1点は作家蔵



《ID400》部分 ©Tomoko Sawada

澤田のデビュー作と呼ばれているシリーズで、大学の卒業制作の作品として「変わらないはずの内面と簡単に変わる外見」というコンセプトで作られました。街中にある自動証明写真機で400回変装して撮影されています。この《ID400》の中に《SKIN HEAD》も含まれ、《SKIN HEAD》は400枚の写真を撮り終えた後、澤田が自身で髪を剃り、ノーメイクで撮影しています。この頃から澤田の大きなテーマは変わっていません。外見と内面の関係について切り口（コンセプト）を変えて作品を作り続けています。

13 《Untitled》 1996年 拡散転写方式印画 作家蔵 【初公開】

大学の暗室で大好きな憧れの先輩がセルフポートレート作品を現像していました。先輩の楽しそうな姿とステキな写真を見て、セルフポートレートの授業を待てずに撮った初めてのセルフポートレート作品です。

—— 澤田 知子

作家略歴

澤田 知子 Tomoko Sawada

兵庫県神戸市生まれ、在住。成安造形大学造形学部デザイン科写真クラス研究生修了。

デビュー作《ID400》で2000年度キャノン写真新世紀特別賞、2003年度木村伊兵衛写真賞、ニューヨーク国際写真センターのThe Twentieth Annual ICP Infinity Award for Young Photographer 受賞。2009年から文化庁新進芸術家海外研修制度により、2年間ニューヨークにて研修。世界各地で展覧会を開催するほか写真集や絵本を出版。

主なコレクションに、東京都写真美術館、京都国立近代美術館、兵庫県立美術館、The Museum of Modern Art（ニューヨーク）、International Center of Photography（ニューヨーク）、Brooklyn Museum, New York（ニューヨーク）、San Francisco Museum of Modern Art（サンフランシスコ）、National Gallery of Art（ワシントン）、Maison Europeenne de la Photographie（パリ）など。

東京都写真美術館では、「日本の新進作家 vol.7 オン・ユア・ボディ」展（2008年）、「第9回恵比寿映像祭」（2017年）等に出展。

展覧会カタログ

『狐の嫁いり』 青幻舎発行／価格未定

出品作品図版のほか、担当学芸員や外部執筆者によるテキスト、作家略歴等を収録。

テキスト：結城円（写真研究者）、マルコ・ポーア（ノッティンガム・トレント大学准教授）、

遠藤みゆき（東京都写真美術館 学芸員）

ミュージアム・ショップまたはオンラインショップで発売。NADiff BAITEN TEL. 03-6447-7684

開催概要

展覧会名 [和] 澤田知子 狐の嫁いり

展覧会名 [英] Tomoko Sawada: To Be Bewitched by a Fox

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

会期 2021年3月2日(火) - 5月9日(日)

会場 東京都写真美術館 2階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099 www.topmuseum.jp

開館時間 10:00 - 18:00 ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日(ただし5月3日[月・祝]は開館)

観覧料 一般 700円 / 学生 560円 / 中高生・65歳以上 350円

※小学生以下、都内在住の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)は無料。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびコピーライト表記 ©Tomoko Sawada をご明記ください。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

* ご掲載前に必ず広報担当者への原稿確認をお願いいたします。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 遠藤みゆき m.endo@topmuseum.jp / 山田裕理 y.yamada@topmuseum.jp

広報担当 平澤 綾乃 池田良子 岡田なつき press-info@topmuseum.jp

諸般の事情により内容に変更が生じる場合がございます。最新情報は当館ホームページをご確認ください。